

## 長春滞在記

ERINA調査研究部研究員 川村和美

中国の吉林省社会科学院および吉林大学東北アジア研究  
院の客員研究員として11月8日～12月6日までの約1ヶ月

間を吉林省長春市で過ごす機会を得た。これはERINAと各機関との研究員相互交流の一環である。

ERINAは2002年1月に、遼寧省・吉林省・黒龍江省といった東北三省の社会科学院との間で学術交流に関する協定を締結した。その内容は今年度から3年間にわたって三省それぞれの社会科学院からの客員研究員の受け入れ、ERINAからの研究員の派遣、共同研究などを実施するというものである。この協定に基づき、今年度は黒龍江省社会科学院から客員研究員を受け入れている。今回の中国滞在は短い期間ではあったが交流協定に基づく研究員派遣である。

また、吉林大学東北アジア研究院からは過去2名の客員研究員を受け入れた実績があり、2003年1月から3人目の客員研究員を1年間受け入れる計画となっている。今回はERINAからも研究員を派遣することで相互交流を促進させ、関係を強化することを目指した滞在中であった。

1ヶ月の長春滞在中は吉林大学東北アジア研究院の研究室を利用し、そこを拠点に吉林省社会科学院を定期的に訪問する形で、両機関の研究員との情報交換、意見交換を行った。加えて、滞在中に黒龍江省・新瀋陽市経済交流促進会議への参加、長春市新立城鎮、琿春市の訪問などの機会を得た。ここでは、中国滞在中の概要を簡単に紹介したい。

### 吉林省社会科学院

吉林省社会科学院は1958年に創立されたシンクタンクである。2001年には吉林省内にある三つの社会科学系研究機構と合併した。院内には朝鮮・韓国研究所、日本研究所、ロシア研究所などがあり、それぞれ専門的な研究に取り組んでいる。社会科学院の図書館は吉林省四大図書館の一つであり、中でも満鉄調査部が編纂した資料や収集した約3万点に上る図書が所蔵されている満鉄資料館は全国的にも有名である。

今回は共同研究のテーマの一つである中国東北地域の都市情報に関する研究の打合せを行い、それに関する資料・情報の提供を受けた。また研究報告会が開催され、ERINAが取り組んできた北東アジア輸送回廊に関する調査・研究について報告した。この報告会には北東アジアの各国をそれぞれ専門的に研究している研究員約30名の参加があり、各国からみた輸送回廊整備の意義、実現のための方法、資金調達の手段などさまざまな面から意見交換を行うことができた。

### 吉林大学東北アジア研究院

東北アジア研究院は1994年に設立され、東北アジア（北

東アジア）各国について、政治、経済、歴史、文化など多方面から研究を行っている。院内には日本研究所、朝鮮・韓国研究所、ロシア研究所、人口研究所などがある。大学の研究院であるため、修士課程、博士課程の研究生も多く、講義が行われている様子は私にとってはとても新鮮であった。

吉林大学は92年に琿春市開発区と共同で図們江開発研究所（東北アジア研究院内）を設立して活動してきた。その役割を強化し、研究を一層進めることを目的に、2002年7月に吉林大学東北アジア研究院、琿春市政府、延辺朝鮮族自治州開発弁公室、吉林省図們江地区開発弁公室の4者が協定を結び、図們江国際開発研究所を設立することを決定し、署名を行った。9月にはこれに国务院図們江開発協調領導（指導）チームも加わった。現在は東北アジア研究院内に「図們江国際開発研究所」が設置され、中朝間、中口間、中蒙間の経済合作区の設定に関する研究を中心に取り組んでいる。一方で、三亜（北東アジア・東南アジア・中央アジア）に関する研究を行い、各地域の専門家を集めた会議を開催するなど幅広い面から北東アジアを捉える活動も行っている。

東北アジア研究院でも滞在中に研究報告会が開催され、ERINAが取り組んできた北東アジア輸送回廊に関する調査・研究について紹介することができた。この報告会には修士・博士課程の研究生、教授などを中心に50名ほどが参加し、「輸送問題を考える上では各地域の産業構造や企業立地、新産業の創設なども併せて検討すべき」、「教育や研修といった取り組みも輸送回廊の実現を支えるものである」と重視すべき」などのコメントを受けた。また研究院の活動の一環として、長春新立城鎮、琿春市を訪れる機会を得た。いずれも大変貴重な経験となった（後述）。

### 黒龍江省・新瀋陽市交流促進会議

滞在中、黒龍江省ハルビン市にて黒龍江省・新瀋陽市経済交流促進会議が開催されたので参加した（11月21日）。会議では、新瀋陽市側からの提出議題が9件、黒龍江省側からの提出議題が6件あり、それぞれについて関係者が協力方法などについての提案などを行いながら意見交換が行われた。

新瀋陽市側から提出された議題には、JICA「草の根技術交流事業」本県2プロジェクトの経済交流への発展の可能性、道路舗装（排水性舗装・コンクリート舗装）の技術移転、観光交流の推進、北東アジア・ビジネスメッセ（NAB-Messe）への協力依頼などがあつた。黒龍江省側は担当部局の関係者を集めていて、その場で前向きな回

答がなされた。この案件については実施が遅れているが、その理由を中国側が中央政府に申請中であるがまだ中央からの許可がおりていないためと説明した。これまで積み上げてきた交流の成果としても今年度中に実施することが次へつなげる重要なステップとなることから日本側は再度黒龍江省側に協力を呼びかけた。黒龍江省側も具体的に実施したいプロジェクトを積極的に提案し、中央政府への積極的な働きかけを約束した。

ERINAからは2003年6月に実施する北東アジア・ビジネスメッセ（参照：<http://nab-messe.erina.or.jp/>）への黒龍江省企業の参加呼びかけ及びそのとりまとめを中心とする協力を依頼した。このビジネスメッセは北東アジア各国・地域から参加する企業・団体・地方政府（自治体）相互のビジネスチャンスやビジネスパートナーの発掘、投資情報の交換を行い、貿易・投資・技術交流の拡大を促進することを目的に新潟市で開催する多国間商談会である。過去に実施してきた中国東北地域の食材商談会の規模を地域面でも商品面でも拡大させたものである。当方の依頼に対して、黒龍江省側は担当する対外貿易経済合作庁から、企業に呼びかけて参加企業を募り、代表団を組織して必ず参加するとの回答を得た。

黒龍江省側からの議題には、2003年第14回中国ハルビン経済貿易商談会への参加依頼、中国国際冬季体育用品・冬季服装展覧会への参加依頼、2003年黒龍江省（日本）投資貿易商談会、黒龍江省国有企業の技術改造プロジェクトへの協力、研修生の受け入れ、新潟県大連経済事務所の活用が挙げられた。新潟県側からは全面的に協力する旨の回答がなされ、情報交換など頻りに連絡をとり、新潟と黒龍江省間の貿易の増加に向けて協力していくことを確認した。

この会議に参加するために、今回初めて長春からハルビンへの移動に高速バスを利用した。バスは30分に1本以上の頻度で運行されていて、料金は69元（約1,000円、1元は約15円）であった。長春～ハルビン間（約240km）の高速道路を利用し3時間10分で両都市を結ぶ。列車を利用した場合（硬座37元）よりも高いが、運行頻度が高く、走行時間も短いといったメリットがある。ただし、冬場、路面が凍結しているなど悪天候時にはおすすめしない。

### 長春市新立城鎮訪問

東北アジア研究院の教授に同行し、長春市にある約30の鎮の一つである新立城鎮を訪問した（11月15日）。この鎮は吉林省の十強鎮にも選ばれている長春市南部の人口2.7万人の鎮である。この鎮は農業に限らず、工業も盛んで、

観光業にも力を入れているとのことであった。確かに、のどかな風景の中に、工場が点在しているのが窺えた。

この鎮の主要な工業に、フォアグラ生産・加工、ワイン製造、注射針を中心とする医療用品生産などがある。特にフォアグラはフランスへ大量に輸出していて、現在、加工量の拡大にあわせて大型工場を建設中である。完成予定は2003年5月とのことであった。観光面では新立城ダムのほか、スキー場やゴルフ場を目指して観光客が訪れているという。

この鎮の更なる発展を目指して、鎮長および関係者は専門家との意見交換の機会を設けていた。この日同行した東北アジア研究院の教授もその専門家の一人として、アドバイスをを行っているという。この日の意見交換の中には、観光客をさらにひきつけるためにダイビングプールを作ろうか、水族館がいいかなどのユニークな意見も飛び交った。

また、日本との取引にも積極的で、2003年の4～7月の間に日本を訪問する予定とのことであった。日本では、スーパーに行って農産品などがどのように売られているのか、流通の仕組みはどうなっているのかを勉強したいという。また中小企業の経営にも非常に関心があるとのこと、日本の中小企業を数社訪問し、経営や管理の方法などを学び、新立城鎮での企業の経営に役立てたいと語っていた。さらに日本の中小企業診断士という資格は今後中国においても必要となってくると思うので是非講義を受けたいと熱心に話してくれた。東北アジア研究院の日本事情に詳しい教授がアドバイスしているとは言え、その前向きな姿勢、積極的な態度には感動を覚えた。

2003年6月に開催予定の北東アジア経済会議、北東アジア・ビジネスメッセの話をする、訪日は6月として、会議・ビジネスメッセにもぜひ参加したいと言ってくれた。特にビジネスメッセは非常に良い機会なので新立城鎮の特産品を持って商談に臨みたいと意欲的であった。こうした話を受けて、早速6月にあわせて具体的な訪問の日程を組む行動力には驚いた。

自由な発想・活動が独創的な政策へとつながり、こうした積極性と行動力が活力のある地域づくりにつながっていくのを感じた。

### 琿春市訪問

吉林大学東北アジア研究院では現在琿春市と朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）羅先市との間に、国を跨いだ経済合作区を設立すべく、調査・研究を進めている。現段階での両地域の将来の発展計画（都市計画、産業計画など）を整理し、それぞれの計画を最大限活かしながら両地

域で協力できる分野とその方法、効果的な合作区の設立方法、長期的な両地域の発展計画などを検討している。この研究は、現地政府関係者・担当者との意見交換を行い、それらの意見を取り入れて少しずつ修正しながらより実践的な計画を作り上げていっているところが特徴的である。

今回、この調査の一環として、11月27日～29日の琿春出張に同行する機会を得た。研究院の訪問団は私を含めて8名であった。琿春到着後は2班に別れ、5名が羅先市へ行って関係者と意見交換を行い、残りの3名が琿春市政府関係者と意見交換を実施し、関連資料の収集にあたった。私は琿春に残った。

この調査団は既に1度北朝鮮側と意見交換をしており、北朝鮮側の意見を取り入れた形で修正した案を持って今回再度羅先市を訪問している。ここでの意見交換を受けて再度修正を行い1ヶ月以内に再び北朝鮮を訪問する予定とのことであった。

琿春市では琿春地域の今後の地域発展計画などを調査した。都市計画、建設、観光、貿易投資、税関管理などを担当する各部局を一つ一つ訪ねて、関連資料収集を実施した。日本からの訪問団の場合はかなり詳細に日程が組まれており時間の余裕がないが、今回の訪問では話を聞いて関連部門の担当者を紹介してもらってはそこを訪れ、またその訪問先で関係部門を紹介してもらうといった臨機応変な訪問、情報収集ができた。各部門を訪ね、徹底的に情報収集に当たる姿勢は勉強になった。こうした交流・意見交換を重ねながら研究者と地域政府との間に非常に強い信頼関係が構築されていることを感じた。これは将来大きな成果となって現れることであろう。

琿春滞在中の空き時間を利用して、初めて中国と北朝鮮とを結ぶ沙坨子税関を訪問した。琿春市内から約20分の所に位置する。琿春には沙坨子税関以外にも中口の琿春税関（長嶺子税関）、中朝を結ぶ圈河税関がある。琿春税関、圈河税関は1級税関であり、第三人も通過できるようになっているが、沙坨子税関は2級税関であるため第三人の通過はできない。税関職員に話を聞く際は代表者の身分証明書の提示を要求されるなど厳しかった。第三人の訪問は事前に許可を得る必要があるなど困難であるため、私は中国人になりすましていたしかなかった。

訪問した夕方の時間帯は両国を結ぶ橋を北朝鮮側からトラックがやってきた。20分ほどの間に5台の小型トラックが走行してきた。いずれも中国ナンバーの車で、北朝鮮の水産品を載せて戻ってきたところのことであった。沙坨子税関の2002年1～8月の貨物通過量は輸出3,323トン、輸入が1,534トンであった（琿春税関は14,656トン、

13,973トン、圈河税関は70,539トン、15,526トン）。

また、9月に琿春を訪問した際に見学した「中口互市貿易市場」を再度訪れてみた。残念ながら今回の訪問時には稼働していなかった。聞くと、9月のオープンが試験稼働であって、その状況をもとに正式稼働の許可が下りることであった。11月末の段階ではまだ中央政府から正式稼働の認可が下りていなかった。対口交流の拡大の一翼を担うことが期待されていただけに残念である。早期正式稼働が望まれる。

### その他雑感

11月の長春市はマイナス10度を下回る日が多く、日本とは比べものにならない寒さに戸惑ったりしたものの毎日忙しく充実した時間を過ごすことができた。長春は何度か訪れたことがあったが、出張ではなく滞在となると感じ方もまた異なった。

長春で暮らす人々と同じように路線バスに乗って移動してみたり、市場やスーパーへ行ってみたり、美容院や映画館に行ってみたりして、想像以上に暮らしやすい都市であることを実感した。長春に到着してすぐに1,000円で購入した携帯電話は中国の友人たちはもちろん、日本との連絡を取る上で強力な道具となって活躍してくれた。研究院内でも訪問先でも至るところで携帯電話の音が鳴り響き、携帯からメールを送ったり、インターネットにアクセスしたりする様子は日本と変わりが無い。自家用車を持つようになった中国の友人も少しずつ増えていることや街で配られるマンション販売の広告の量の多さには驚かされた。

また、中国の方々の人的ネットワークには感心させられた。食事をすると自分の友人や仕事上の関係者などを数名招いて紹介し、互いのネットワークを広げていけるように気遣ってくれる。そこで知り合った人たちがさらにまた別の知人を紹介してくれて人の輪が広がっていく。その後も仕事面や生活面などで協力してくれる。このような中国の方々の人との付き合い方に驚き、また羨ましく思った。

滞在中、さまざまな方面から協力をいただいた吉林大学東北アジア研究院の皆さん、吉林省社会科学院の皆さん、そしてさまざまな面から助けてくれた方々に心から感謝している。毎回訪問するたびに中国の方々の心遣いには感動させられる。記して感謝の意を表したい。

このような実際にその地に滞在する形での相互交流を継続し、信頼関係を構築していくことの重要性を改めて感じた1ヶ月間であった。